

翻訳

保育における労働者としての男性欧州連合保育ネットワーク討議資料より(2)

小崎 恭弘

**European Commission Network on Childcare and Other  
Measures to Reconcile Employment and Family  
Responsibilities Men as Workers in Childcare Services :  
A Discussion Paper by Jytte Juul Jensen**

Yasuhiro KOZAKI

**SUMMARY**

This article is a translation of “Men as Workers in Childcare Services,” which was published as a discussion paper by the European Commission Network on Childcare in 1996. According to Kinoshita, the paper was authored by Jytte Juul Jensen, a member of Men as Carers Working Group at [the European Commission (European Union)] [the European Community (presently called the European Union)], and was first published in 1995. It was written from the perspective of Jytte Juul Jensen herself and the Nordic countries trying to increase the number of men working in childcare services.

In my last article, I covered “Foreword” and “I. Introduction: An Equal Rights Childcare Centre”, and in this article I move on to “II. Men in Childcare Services, or not?”

**要 旨**

本稿は1996年に欧州委員会保育ネットワークから討議用の資料として出された「Men as Workers in Childcare Services」(「保育における労働者としての男性」)の翻訳である。木下<sup>(5)</sup>によるとこれは、EC(欧州委員会)の男性の保育参加に関するワーキンググループのメンバーである、Jytte Juul Jensenによりまとめられ、1995年に発刊されたものである。この資料の内容は、基本的にはJytte Juul Jensen個人、及び男性保育者の増加を進めようとする北欧諸国からの視点で書かれている。

前回は「序章」「I. 序論：男女同権の保育所」について訳出を行った。<sup>(6)</sup>今回はその続編であり「II. 男性保育者は必要か、否か」についての訳出を行う。

## 目 次

### 序章

#### I. 序論：男女同権の保育所

(以上第28号に記載)

#### II. 男性保育者は必要か、否か

1. 子どものために
2. スタッフ間協力のために
3. 親のために
4. 男性のために
5. 労働市場のために

(以上本号)

#### III. 政策

##### 1. 序論

#### 2. 責任を持つ機関

A. 政策の目的

B. 行動計画

C. 新しい行動計画の継続的評価、改正、組織化

#### 3. それぞれの保育施設

#### 4. 研修機関

#### 5. 諸問題

A. 助言とサポート、男性のネットワーク

B. 給料、雇用条件と雇用状況

C. 研究と知識

#### IV. 結論

## II 男性保育士は必要か、否か

この章では、保育における男性の雇用に賛成する理由と共に、それに反対する理由をまとめた。賛成する理由について特に重要な点を述べる。男性を雇用する際に起こる、不利な点と有利な点それぞれに明記している。

この章は5つの項目に分かれており、それぞれの項でより多くの男性を雇用すべき理由が述べられている。

- ・子どものために
- ・スタッフ間の協力のために
- ・親のために
- ・男性自身のために
- ・労働市場、特に男女同権という目的を支持するために

中心となる理由は、子どものためにである。そのためこの項に最も紙面が割かれている。

女性保育者に尋ねると、大多数は男性が雇用されて欲しいと答える。この考えに反対する人やあ

まり賛成しない人は、男性と働いたことがないか、あるいは男性との仕事の中で何かしらの嫌な体験をした人である。肯定的な意見が聞かれたのは、北欧の国だけではない。保育において、男性に強く否定的な態度を取る数少ない国の1つであるイギリスでさえ、家族施設で働くスタッフに関するある調査では、90パーセントの女性が男性を雇って欲しいと答えた。(Ruxton, 1992年)面白い事に、男性より女性の方が高い割合で、より多くの男性が雇用されるべきだと感じていた。報告書は、次のように結論づけている

保育所に女性の数が多すぎるのではなく、男性の数が少な過ぎるのだ。

男性保育者のほうが女性保育者より良いとも、悪いとも言えない。男性保育と女性保育は違うのだ。

ここで示されたアンケートやインタビューのデータによると、有利な点や不利な点といったあまりに詳細で厳しすぎる分類を避けるために、男性の参加に対するより慎重な評価が必要なのである。

(Ruxton, 1992, p.35)

## 1. 子どものために

保育サービスにおいて、男性と女性の数の割合をより等しくすることの主な理由は、そういった保育を受ける子どもの日常生活の質を向上させることである。また、平等という意識を子どもに芽生えさせることを助けるということも考えられる。学校では、子どもの間の平等が問題として焦点があてられてきた。EC機会均等部署はDG XXII（教育、養成、青年担当する一つの機関）と協力してカリキュラムに見られる性別の偏見、教師養成の必要性、性別の問題に対する保護者の考えを含んだ教育における機会均等を調べる一連の調査計画の資金を出した。しかし、就学年齢に達する以前の子どもにおける機会均等の問題は、たいていの場合見落とされてきた。保育者が全ての個々の女の子と男の子を尊重し大切にし、制限された性別の役割を脱する環境や活動を創り出す意識的な性別教育を行うことが、子ども間の平等を達成するために必要である。

保育において、子どもは男性がいても影響を受けるし、いなくても影響を受ける。(デンマークの女性保育者)

次に述べられるほとんどの部分は、この問題に関するデンマークの議論、部分的には北欧の議論に基づいている。この議論の背景には、子どもの自立性や自己決定、そして大人が専門家としてよりもむしろ参加者としての役割をはたす、子どもの成長段階における遊びの重要性を強調するデンマーク特有の教育法がある。子どもの性別意識や役割に影響を与えるのは大人だけではないと、一般的に思われている。子ども自身も他の子どもと一緒に自発性を身に付ける。私の興味はデンマークの経験に基づくが、次に述べられることの多くは、日常生活がデンマークのものとは全く違う国における保育で、男女の保育者が一緒に働くことがどういう意味を持つのかを考える際に役に立つ

であろう。

男の子も女の子もみんな個人であり、それぞれ自分自身の個性を持っている。しかし、男の子と女の子をグループ化して比べてみると、いくつかの共通する違いが見つかる。私がここで焦点をあてるのはこういった共通の違いである。しばしば「男の子は規則にしたがわない。」というような一般化が広くなされるということを明らかにしておかなければならない。しかしこれは、すべての男の子や女の子がこれらの特徴を持っていたり、男の子にのみ、また女の子にのみ見られたりするのではなく、男の子や女の子により著しい特徴や、大人によって男の子の問題、女の子の問題と考えられる特徴である。

デンマークの同権支持者は長い間、平等を達成する最も良い方法は、男の子にも女の子にも保育所で全員に均等の機会を与えることだと考えてきた。全ての子どもは性別を考慮することなく同じ活動に参加すべきである。中立的な性別分けが理想である。しかしながら、これが必ずしも伝統的な性別の役割という概念を壊すことにはつながらないことが示されてきた。

10年ほど前、保育者が負担と感じる問題を起こす、4歳から6歳までの手におえない男の子のグループに関する新しい議論が始まった。デンマークでは、本まで発売されたくらいだ。この議論では、男性の方が手におえない男の子をよく理解し、それゆえこういった子どもの要求を満たす活動を始めることができるという理由で、男性を雇用することが、この問題の部分的な解決策になると考える人がたくさんいた。ここで、子どもと職員の両方の性別に焦点があてられた。後に、手におえない男の子だけでなく、おとなしい女の子も議論された。女の子も注目されるべきである。さらに、男の子と女の子の相互作用も重要であることが認

められた。

子どもの権利と要求を保障するためにより多くの男性保育士が必要である。子どもの権利に関する国連宣言では、子どもは2人の親に接する権利を保障されている。社会的保育環境でも、子どもにこの権利を与えるべきではないのか。

それぞれの性別ごとに特に配慮されるべき特徴とアイデンティティーがある。これは原則的機会均等の目的をめざさないということではない。(Milde, 1995, p.6)

#### 男の子と女の子、男性と女性のスタッフの関係

男の子と女の子は違うもので、違うように発達することもまた、保育に反映されている。男の子と女の子では、違う遊びや活動が選ばれる。これによって、保育者に新たな課題が与えられる。

女の子は空想的なゲーム、ままごと、お絵かき、形を作って遊ぶことに、男の子より多くの時間を使う。そこでは、大人の参加が許されている。女の子の遊びはたいてい2、3人のグループで行われ、遊びの面白みは、グループ内の相互的な子どろのやりとりである。仲のよい友達同士の限定されたグループでは顕著に、誰がそのグループに含まれていて、誰が含まれていないのかが考えられる。お互いを受け入れたり、拒否したりすることが遊びの重要な要素である。策略も遊びの要素であることがあり、女の子は拒否されることを受け入れなければならないが、これは大変なことであろう。遊びの間にお互いに交渉する能力や、感情を理解する能力を発達させる。女の子の遊びには、父親、母親、子ども、親戚といった家族が含まれる。女の子は遊びを計画し、多くの規則を作る。そして、室内で遊ぶことを好む。同時に、女の子は大人と遊ぶことができる。大人と一緒にい

ることや、大人を助けることが好きである。女の子が男の子の遊びをすることはあるが、男の子が女の子の遊びをすることはほとんどないようである。

例えば、女の子にとって友達はなぜこれほどまでに重要なのだろうか。女の子のこのひとりよがりや、計画や規則のこだわりは何なのだろう。なぜ男の子は注意をはらったり、少しでも目立たなくしたりしようとししないのか。この最も強い関心が払われるこだわりは何なのだろう。(デンマークの女性心理学者)

男の子が戦争ごっこをすることで伝統的な性別役割を発達させるという仮説は、「もうこれ以上、自分の子どもを抱きしめるのはやめよう。甘やかされた大人になって欲しくないから。」と言うのと同じである。伝統的な性別役割を経験することを許されない男の子は、極端に男らしい大人に成長するのである。(デンマークの男性心理学者)

男の子は、建物を作る遊び、その場で作られる遊び、制限されず荒っぽくみえる遊びに時間を費やす。男の子の遊びはしばしば、女の子の場合より大きいグループで行われる。他の男の子が参加しやすい遊びをするからである。重要なことは、グループの中で、自分がどの位置にいるかということである。男の子の遊びは機能的で、動作やテーマに重点が置かれている。男の子は興奮して遊ぶ。例えば戦争ごっこは、「悪者」と「ヒーロー」の戦いなのだ。彼らは戦い、これを通して身体が発達や争いに関する男の子としての文化的規則を何とか試そうとするのである。これらの遊びのルールはかなり組織的に統制されたものである。男の子の遊びはたいてい、屋外で行われており前もって計画されたものではない。

保育に携わる保育者や他のスタッフは、男の子

と女の子のこのような違いをどのように思っているのだろうか。女性と男性では、反応が違うのだろうか。前にも述べられているように、北欧の国における議論は、保育所で問題を起こす、手におえない男の子に大きく注目している。これらの活発な男の子は、常にじっとしていないで、このことは肯定的に捉えられている面もあるが、反面言うことを聞かず、迷惑をかけ、邪魔をするとも考えられている。男の子は、うるさくすることや場所を取りすぎることと叱られる。男の子の文化を表現するのには、保育所の部屋は狭すぎるということが、ここで明らかになる。男の子の文化は、伝統的に屋外の文化なのである。

低学年の教室に関する北欧の研究によると、教師は80パーセントの時間を男の子に使うのである。静かにするように怒るということもあるが、興味深い事に教師は、女の子より男の子に会話をしようとして話しかけるのである。会話において、男の子の発言の方が、女の子の発言より面白いと教師は感じている。女の子はいい子であろうとする傾向がある。これは、女の子は会話で、繰り返しはするが、新しい発言をしないということだ。これは、男性の教師にも、女性の教師にもあてはまる。最近では、この状況は変わりつつある。これは特に女の子の場合であるが、非常に積極的に参加し、クラスに新しいアイデアをもたらすのである。

自然環境や屋外生活での活動は、男らしさと言ってもいいものとの関係がある。自然の中で冒険をし、子どもに野外活動の経験をさせることは、男性にとって保育の仕事が現実的な職場だと気づかせる方法となりうる。この方法によって、男性保育者と女性保育者の役割の大まかな違いが分かる。男性は環境を巧みに使って子どもと接し、女性は直感的で感情的な方向性を持って子どもと接する。  
(ノルウェーの男性準講師)

保育所における子どもの場合では、次のことが言える。男の子は女の子より難しく、うるさい一方、次のように言われている。

大人である保育士がかわいらしいと思うのは男の子である。おそらくこれは、男の子は大人の女性の目標を反映するからである。女性は女の子のことを良く理解している。女性の大人としての目標は、限界を超えて様々な困難に立ち向かうことである (Dagbladet Information, 1995, p.9)

それでは、女の子はどのようなのだろうか。男の子と女の子に関する議論では、女の子の好む遊びやグループのことについて、女性保育士が遊びを理解しており関心を持っていると考えられることがほとんどである。また、保育所の「屋内文化」は「女の子型」である。たいていどの保育所にも「人形の場所」があり、女の子の活動が多い。しかし、デンマークの青少年の研究者であるジャン・カンブマンは、この「女の子型」の環境に関して疑問を抱いた。

最初女の子は、大人の女性が理解していることで恩恵を受けるかもしれない。しかしこの理解によって、大人の女性は、特定の習性特に全ての感情を理解できる女の子の能力を、尊重するとは限らない。それどころか、保育者は女の子に腹を立てることのほうが実際に多い。女の子の特定の習性に対処することができず、無意識のうちに女の子を無視することを選ぶのである。 (Dagbladet Information, 1995, p.9)

男性保育者が子どもに与える影響に関する研究で私が知っている唯一のものは、スウェーデン (Carlquist, 1990) のものである。男性保育者と女性保育者の数が同じ2つの保育所が、研究の基盤となった。(研究者らは、当時男性と女性の数が同じ保育所はスウェーデンでこの2つだけだと

考えている。) 男性と女性の両方が働いたときの違いを比較するために、スタッフの大多数が女性である伝統的な保育所を対象に行われた初期研究で用いられたのと同じ方法が使われた。Gunn Kärbyは、子どもと女性保育者の関係に関する彼女自身の研究に加筆した。

男性保育者と女性保育者が同数いる保育所でも、男の子と女の子は違う遊びや活動を選ぶという、伝統的な保育所で見られたのと同じ傾向が見られる。同時に、興味深い特徴も見られる。

- ・女の子は、少なくとも活動を選ぶことに関しては、男性保育者がいるということで、大きく影響を受けているようである。
- ・子ども全員が、物を作ったり、動作を含む活動に、より時間を使うようになる。これは、男性は空間的スキルに関して子どもに影響を与えるという、男性保育者と女性保育者の両方が持つ意見を裏付ける。
- ・男の子と女の子の両方にとって、それぞれの遊びをしていない時に、男の子と女の子と一緒に遊んだり、打ち解けた関係を作ったりすることが増える。子どもと大人の、そして大人どうしの会話も増える。
- ・子どもは、女性保育者よりも男性保育者と触れ合い、会話をする。これは、男の子より女の子にあてはまる。

ここで筆者は尋ねている。：会話や触れ合いはたいてい、近くにいる人と行われるものなので、男性保育者の方が近づきやすいということなのか。それとも、子どもは男性を好んで選ぶのか。もしそうなら、なぜなのだろう。父親の役割を研究したPruettが言うように、父親や男性の「刺激スタ

イル」が働いているのだろうか。

女性は同時にいくつかのことをできると、よく言われる。女性は子どもや計画することに関して、全体を概観する立場から見ような考えを持っているので、熱心に子どもと接することが難しいのであろうか。子どもはこれを感じ取るから、男性と接することを好むのだろうか。このテーマの研究が進まなければ、答えは出ない。しかしながら、男性保育者がいれば子どものふるまいが変わるという事実は、この研究で明らかにされた。

男性保育者は、とても困ったり、迷ったりしているかもしれないシングルファーザーを励ましたり、支えたりできる。また、子どもの養育責任を負う父親を励ましたり支えたりできる。(イギリスの男性研究者)

#### 単親の子ども

保育の現場にもっと男性を雇用することに関する議論の一つの根拠は、単親（たいていの場合女性）の子ども（男の子も女の子も）に対する影響が挙げられる。こういった子どもは、家で持つべき男性像を欠いており、男性保育者は、そのような人になれる。同じことは、何度か父親が代わるケースの子どもにも当てはまる。このような子どもに、安定した、明確な男性像が特に必要であることは、どのように子どもがなついてくるかということ話を話す多くの男性保育者の意見で裏付けられた。これは男の子だけに当てはまるのではなく、たいていの場合、女の子にも当てはまる。これは男性保育者の存在が、多くの単親や家族が困難に直面している場合においては、特に重要であるということである。

男性保育者の必要性についてより厳しい意見もある。それは「もし男の子が家で女性しかいない環境で育てば、保育所や学校に入ったときに、自信がないとか、暴力的になりうるという極端な男

性性だけを持った男の子や青年になる」という意見である。このような方法で暴力的な青年を説明してしまうのは、女性を責めているように聞こえる。女性のみ環境についての考えや、他の理由が多く挙げられると、こういったことはあまり意味を成さないであろう。保育所に男性を雇用することは、ある特定の子ども問題の解決策にはならないが、助けにはなるであろう。

デンマークにあるすべての保育所では、男性保育者やアシスタントの必要性が高い。シングルマザーや家庭問題が多く、社会的に恵まれない地域では特にである。ここで例を挙げたい。2人の子を持つ親が離婚した。兄の方は、父親がいないのを大変寂しく思い、私のことを否定的な男性像とした。3ヶ月間、その子は、自分の父親の方が私よりもいいと言って、からかった。私はその子がそうするのを許した。そしてついに、それを乗り越えた。数多くのひっきりなしに違う男性と生活する母親を持つ女の子も、私を安定した男性像とする。そして、男性が信頼できるものであることを理解する。(デンマークの男性保育者)

#### 性別を考慮した教育法

男の子と女の子は、いくつかの点で違いがあり、違う遊びや活動を選ぶ傾向にある。したがって保育所において男性、女性の両方のスタッフは、それぞれに応じた遊びや環境を用意する必要がある。もし、男の子と女の子の要求を満たそうとするのなら、毎日の仕事にこういった違いを考慮しなければならない。

今日デンマークでは、性別による特定のふるまいが保育に反映されなければならないということを強調するという性別を考慮した教育法を、意識的に使う保育所もいくつかある。こういったことは、女性だけの保育所、男性が少しいる保育所、男性がたくさんいる保育所、言い換えればスタッ

フの性別に関係なく、考慮されなければならない。

最も重要なことは、男の子も女の子も含めた全ての子どもと、彼らのそれぞれに異なった要求が尊重されるという考え方である。

我々が思うに、男女同権を達成するために不可欠なことは、すべて子どもの要求の重要性が強調されることである。(Milde, 1995, p.16)

例えば、戦争ごっこを含む男の子の遊びは、他の遊びと同様にみなされるべきである。以前は、男の子には禁止されるものが多かったが、今日ではその多くが禁止を解かれている。

これは、少なくともよいスタートである。なぜならひとつには、人が面白いとか、興奮するとか、重要だと思うものが、基本的に悪いとか、禁止されている、と度々言われれば自分の性に対して肯定的な態度を持って成長することは難しいからだ。(Milde, 1995, p.60)

同様に、女の子の遊びも尊重されなければならない。

屋内、屋外の両方の環境は実際に変わりつつあり、その結果、男の子と女の子両方の活動のためのスペースが設けられている。大人は、子どもをわくわくさせ、刺激を与える環境を作るべきである。

保育所の中には、意識的に同権を生み出すには、区別が必要であるという考えに基づいて、男の子と女の子を分けた活動を行う所もある。アイスランドのある保育所では、男の子と女の子人数比率が、極端に差があるという性別により分けられたグループを作るというユニークな方法を取った。(Kruse and Olafsdóttir, 1992)

また、この保育所では、男性職員を雇いたくないのである。別のプロジェクトでは、女の子が優

先的に扱われた。これによって、男の子の行動に影響がでた。また、男の子と女の子の関係は、より均等になり、より一緒に遊ぶようになることも、このプロジェクトで発見された。(Milde, 1995)

子どもが自立してくるにつれて、女の子は、自分の限界まで挑戦することをしなくなり、男の子は友人と親しい関係を作る能力を育まなくなる。それゆえ、一方で子どもが必要とするもの(女の子にとっては、親しい関係、男の子にとっては、強くあること、支配力を持つこと、自分を抑制すること)を理解し受け入れること、また同時に子どもが自分とは違う異性の持つ特徴を理解し、育むことができるのかを論議することは、良い考えであるだろう。女の子にとっては、これはひとつには、自分の能力を充分に発揮する事や挑戦する能力や“No”という権利のことであり、男の子にとっては、感情を受け入れる能力や自分自身の感情的な面のことである。(デンマークの女性心理学者)

デンマークのある保育所では現在、世話好きな男の子と、騒がしい女の子についての議論が行われている。ここでの目的は、女の子は“ノー”ということを、男の子は「気を使うという役割」を学ぶべきだというものである。男の子は、女の子と違う方法で気を使うのであるかもしれない気がついているスタッフもいる。

平等という意識をもって子どもを育てるためには、保育者は全ての子どもと、彼ら一人ひとりの要求を尊重することが要求される。また、これらの違う要求に答えるのに、屋外だけでなく屋内にも刺激的な環境を作らなければならない。同時に保育者は、子どもが性別によってどんな活動を選択するのか理解しておかなければならない。おそらく、これを実行するための政策や提案は、どちらか一方の性別だけの集まりよりも、女性と男性の様々な特徴をもつ男女両方の集まりによっての

方が、実現されやすいだろう。どちらか一方の性別だけのスタッフにとって、子どもを公平に扱ったり、教育したりすることは難しい。なぜなら、子どもは我々が言うことよりも、我々がしていることをするからである。

男の子と女の子のありのままを受け入れると同時に、良い模範となることや、刺激的な環境や経験を与えることによって、新しい将来性を示しなさい。保育における親密さは、一般的に平等で相互的な関係であるが、それは適切な保育を行うための良いキーワードである。男の子も女の子も子どもであることの権利を保障されるべきで、余りにも早期に自分の性別と結びつけたり、適応したりすることを強要されるべきではない。(デンマークの女性心理学者)

男の子の場合、次のことも重要である。

- ・ 男の子の活動のための空間と、それが受け入れられること
- ・ 日常生活で、身近に男性がいること
- ・ 彼らの回りの大人を理解する権利、自分の感情や優しい面を感じることで、そしてそれが受け入れられること
- ・ 男の子を男の子として理解し、尊重でき、彼らの味方となり、活動的にになれる女性が身近にいること

女の子の場合には、次のことも重要である。

- ・ 自分の能力を充分に発揮する権利や“ノー”と言う権利
- ・ 成長する過程で女性と男性の両方が近くにいること
- ・ 自分の賢さや手柄をただ誉めてくれる代わりに、自分の性格を受け入れてくれる大人が身近にいること
- ・ 口うるさすぎず、しっかり説明をしてくれる大人  
(デンマークの女性心理学者)



女性は、男性像として男性の代わりを務めることはできないし、女性の多くは、男性と同じように、荒っぽく乱暴な遊び（保育所では、重要な活動である）に関心を持つことができない。男性を雇用することは、単なる男女間の伝統的な仕事区分の問題ではない。そして、男性保育者と女性保育者の役割の違いを「男性は環境を巧みに使うことによって子どもと接し、女性は直感的で感情的に子どもと接する。」(Milde, 1995, p. 67)とみなすのは、非常に単純すぎる。例えば、男性も女性も保育をするが、違う保育の態度を持ち、違うやり方をするのである。そのような立場で考えれば、保育とは何なのであろうかという疑問が自然とわき起こる。

フィンランドで行われた、68人の女性と126人の男性の幼稚園・保育園スタッフの調査結論も、とても肯定的なものであった。

現在行われている調査によると、男性職員と女性職員はお互いに、欠点を補い、釣り合いを保つこと、そして男の子と女の子の両方のためになる様々な活動や理想的な性別像を保証することができ  
る。またこの調査によって、スタッフのほとんどが女性である保育所に、より多くの男性を雇用することが支持されている。(Tamminen, 1994)

しかし、少ないながらも十分な数の男性が、保育の現場に雇用されるまでには、何年もかかるであろう。女性が保育において多数を占める限りは、女性が性別教育を意識し、子どもに男性の特徴を示すことが重要である。また、男の子文化だけでなく、女の子文化も尊重しなければならない。保育という仕事において、男の子と女の子の両方を尊重し、制限された性別の役割を変える環境や、変化に富んだ刺激的な活動を提供しなければならない。

「保育特有の性別問題」と呼ばれる多くの問題は実際のところは当然の教育問題である。男の子がいらいらしながら座って、話す機会を待ち、そしてその機会が来るとできる限り発言するという「チャットサークル」という状況は、我々の関わり方などの対応が悪いことを示すものである。もし、20人の大人が座って、たった一つのバターの皿が来るのを待っているとしたら、その状況を受け入れはしないだろう。子どもは実際には、興味のないものをそんなに長く待てないのである。そして、最初にいらいらしだすのは、男の子である。  
(デンマークの男性保育者)

大人は、子どもの遊び文化や、女の子は繊細で、男の子はやんちゃであるということを尊重するべきである。子どもが遊ぶのを邪魔しないでおけば、彼らの遊びはとても伝統的な性別の役割となる。彼らは自分の性別におけるアイデンティティーを探しているのである。(デンマークの男性研究者)

男の子は女の子に育てられるべきではないし、その反対もなされるべきではない。それは目的ではない。最高の可能性を与え、全ての人が男性的な面と女性的な面を持っている（このことによつてのみ、完全な人間になれるのだが）という考えを受け入れることが目的とならなければならない。  
(デンマークの女性保育者)

#### 性的虐待

男性を雇用する上で、性的虐待をするかもしれないということが、議論として挙がっている。この議論は、特にイギリスで盛んに行われている。デンマークではまったく問題にならない。これは、保育における性的虐待の事例が見つけれないということではなく、事例が見つかって、男性の雇用に対する議論としては決して使われないということである。この議論は、デンマークの状況においては全く理解できないようである。

イギリスでは、この議論は男性が保育に携わり、年少の子どもと触れ合うべきではないと提案する最たるものとなった。これはイギリスでは虐待が頻繁に起こり、性的虐待の大部分には男性が関わっており、心理的にも感情的にも、虐待者と他の男性を区別することができないからとの理由によるものである。

これらの事実をふまえると男性の虐待に対する、女性の考えが理解できる。その範囲というのは、レイプ、殺人、性的虐待から、他人を困らせたり、人の上にたって話したりといった日常の行いまで、すなわち、全ての男性によって引き起こされる、女性、子どもそして他の男性への日常的な虐待行為にまで及ぶ。このような分析によって、全ての男性が日常的な虐待行為から、暴力や性的虐待やその他の虐待の段階までの範囲の中で、それらを行う強い可能性があるということが指摘されている。(Pringle, 1992, p.11)

イギリスにおいてこの議論によって、男性に対し多くの直接的、間接的制限が課せられた。例えば、ひざの上に子どもをのせてはいけなとか、女性スタッフの付き添いなしにおむつを換えてはいけなとか、概して、体が触れることに関して大きな制限がある。これらの制限は、子どもと男性スタッフの両方のために支持されている。

最近のイギリスでは、私立の託児所の男性スタッフが、性差別を理由に雇用主を裁判所に訴えた。男性のスタッフとして彼は女の子をトイレに連れて行くことが許されないからであった。そして彼はこの訴訟に勝った。

男性が、絶えず疑われ、議論が広く行われる環境で働くことは、大変不愉快なことに違いない。この訴訟では、男性という性に焦点が当てられるのに対し、女性に関してこのようなことは全く起こらない。男性という性に焦点が当てられるのに

は、多くの男性保育者がホモセクシュアルであると考えられる時もある。ここでもまた、女性に関してこのことが言われることはない。

託児所で、男性が子どもを虐待するという大きな問題に関する調査はこれまで行われてこなかった。幼児保護団体“Kidscape”(子どもの風景)の所長であるエリオット氏は、「確かなことは、幼児虐待者は保育関係の仕事に引きつけられるということである。小さい子どもをだますことは非常に簡単であり、5歳以下の子どもがその対象として格好の対象なのである。彼らはだまされやすく、人に言わない傾向がある。私は、未熟な子どもとともに働きたいという男性を非常に注意して見るだろう。」と、述べた。(Daily Telegraph, 1993年10月4日号)

私は、男性が子どもをトイレに連れて行くことを許さないことは、子どものためだけではなく、その男性のためでもあると思うが、その考えが好きではない。それを変えたいと思う。しかし私は、虐待者のために30年近く働いてきたが、まだ私は彼らに騙されるかもしれないのだ。彼らは口先がうまく、感じがよく、ずる賢く、ごまかしがうまく、神経質なのである。幼児に性的虐待をする人間にとっては、幼い子どもは非常に理想的なのである。なぜなら、彼らは法廷で証言するには幼すぎ、どのようにしていいかわからないからである。それゆえ、子どもを虐待する人は、保育の仕事に引きつけられるのであろう。これは言いたくないのであるが、男性が保育に携わるのを可能にするために我々は多くのことを警戒してもしすぎるということはない。(Michele Elliott, 1995年のDoddに引用)

イギリスの男性保育者の中には、子どもを虐待の危険から守る必要があるという認識に基づいて、より積極的な手段を提案する人もいる。ある会議

で、彼らは保育を安全なものにするための幅広い政策を推奨した。例えば、子どもの言うことに耳を傾けること、性的発達を含む子どもの発達、どのような状況下で虐待が起こるのか、そして虐待の徴候に関するスタッフトレーニングや自己認識の向上、スタッフが責任を持てるようにすること、保護者の参加、子どもが自己主張ができる集団に育つ方法、子どもに対してスタッフの数を多くすること、雇用を決める際の慎重な手順などである。これらは次のように要約される。

虐待は、秘密にされることによりその勢いを強める。もし施設の雰囲気、大人と子どもが自分の言いたいことが言えるようなものであり、個人がエンパワーメントとされているようであれば、虐待の可能性はとても小さなものになる。施設の構造や考え方や方針が積極的に、どんな年齢や地位の人もお互いに敬意をもって聞くことが奨励されるという自由なコミュニケーションの問題に取り組むのであれば、大人、子ども、男性、女性、経営者、労働者、保育利用者、保育生産者の関係における権力の乱用は避けられるだろう。これは、明らかに解決の途上にある錯綜した課題である。  
(Chandler and Dennison, 1995, p.44)

## 2. スタッフ間協力のために

大多数の女性保育者は、男性の同僚が欲しいと思っており、これは北欧の国においてのみ当てはまるのではない。賛成する理由のひとつは、スタッフ間の協力がうまくいくということである。

序論で述べられたゴテンブルグの男女同権が与えられている保育所では、男女の数が同じスタッフ集団で、肯定的な経験が多く得られた。会話のスタイルも異なっており、より幅の広い内容が語られるようになった。男性の会話スタイルがストレートなために、問題がかなり早く解決されたので、それは女性に受け入れられた。その保育所で

は、男性・女性いずれにおいても、ほとんどスタッフ間の衝突がなかった。

保育における男性に関するノルウェー協議会が開いた講習会では、大人の男性と女性のコミュニケーションのあり方というテーマが、多くの参加者の関心をひいた。男性と女性のコミュニケーションの仕方は違うということに、非常に強い関心と同意があった。

男性は、女性のシグナルを読み取り理解する能力がない。コミュニケーションの際に女性が使うと男性が思っている間接的な方法が、スタッフ間協力において問題と誤解を引き起こす。男性は、自分のコミュニケーションの方法が直接的で率直だと思っている。これも、男女両方のスタッフがいることの強みである。コミュニケーションの仕方が違うゆえに、コミュニケーションがきちんとむかいあってなされ、その結果望ましい状況になり、女性か男性どちらか一方の労働集団におけるコミュニケーションより良いものとなる。(Milde, 1995, p.65)

保育における実務的な仕事を共有することは、男女間の不安が生じるかもしれない部分のひとつである。保育所には、毎日行われなければならない様々な実務的な仕事がある。家事における時間の調査では、女性が大部分をしていることが分かっている。このパターンが当てはまる保育所もある。これによって問題が起こる。というのも、女性は後片付けや清掃や飾り付けなどの女性が普段行う実務的な仕事の全てが任されていると感じる一方、男性は釘を打ち込んだり、電球を替えたり、修理や大工仕事などの典型的な男性の仕事の全てを行うべきだと感じているのだ。女性の「家庭内労働」に従事するスタイル、言い換えれば、全ては女性的なやり方で、きれいでかわいらしくあるべきだという考えについて話す男性もいた。別の保育所

(この報告書でのほとんどの保育所)では、男性も女性も実務的な仕事に関して問題があるとは感じていない。これらの保育所では、仕事は均等にまた適切に分けられている。

男性のスタッフがいることは、多大な利益となり、男性が働いている時には著しく違う雰囲気生まれる。男性が進んで子どもと遊戯活動に参加したり、食事を作ったりすることは、保育所を利用する女性や子どもにとって、一般的に容認されている、家庭における男性の役割の固定観念に挑んでいく助けとなる。(イギリスの女性労働者)

男性と女性の両方の保育者に関するほとんどの文献やインタビューや会談は、スタッフ間協力の肯定的な効果を裏付ける。否定的な考えを持つ人は、以前から男性と働こうとしてこなかった人か、一人だけとしか働こうとしない人である。よいチームワークを生み出す重要な要素の一つは、保育所に二人以上の男性が雇用されるべきであるということである。つばめが一羽来たからといって夏にはならないのである。男性が一人という環境では、その男性は取り残されたと感じ易くなり、男性の習慣が理解されるのは難しくなる。孤独な男性は、自分が名ばかりのものだと感じ易くなる。仕事のチームから孤立し、除外される。それ故に二人以上の男性を雇用することが重要なのである。

より多くの男性が雇用されると、保育所の伝統的な習慣に対する反体制文化が生まれるだろう。保育所はもはや、男性のやり方を無視することはできない。男性の習慣は、女性保育者にとって、重要な模範となるかもしれない。男性には女性とは違ったやり方があるので、日課や日常の習慣や規則などを話し合うことが必要であろう。このように、男性を雇用することは保育所の発展の可能性を与えるものとみなすことができ、保育所の習慣の変化をもたらす力強い要因となりうる。

男性が雇用されている保育所では、男性と女性の両方がいることから、どのように潜在的なメリットを引き出すかということを知っておくことが重要である。女性が大半を占める職場と、男性が大半を占める職場の風習は、全く違うものである。男性が雇用されている保育所では、変化がしばしば起こり、それは意識的なものと無意識的なものの両方でありうる。ここで重要なことは、新しく作られた男女混在のスタッフがどのような変化を起こしたいのかを話し合うことである。自分達がお互いどのように補い合い、自分達の違いからどのようにメリットを得ることができるのだろうか。

保育に携わる男性には多くのことが要求される。彼らは適切な男でなければならないし、伝統に従わず、男らしくあるべきである。しかし同時に、彼らは保育の環境に馴染むべきで、伝統的に女性の仕事を女性に任せるべきではない。そうでなければ、自分達が子どもであり、ただ遊びたいだけだとみなされる。保育における女性には、そのようなことは要求されない。(スウェーデンの男性保育者)

私にとっては、保育所により多くの男性がいることは重要である。私の勤める保育所で、私が唯一の男性だった時には、女性は私にとっては閉ざされた集団として、女性同士で話をし、私を仲間はずれにした。彼女らの特定の興味が支配的なものとなった。もちろん、男性が11人で女性が1人であったなら、その逆のことが言えるだろう。(デンマークの男性保育者)

### 3. 親のために

子どもの親は、保育所に男性保育者を置くことに多くは肯定的である。最初は疑問を持つ人もいるが、男性も保育に適していると分かると、すぐに受け入れるようになる。概述したように、単親の中には、保育所に男性スタッフがいると特に喜

ぶ人がいる。子どもにとって男性が身近にいることの重要性を認めているのだ。多くの父親も、男性保育者の存在に満足している。多くの男性保育者が言うには、状況によっては男性のほうが父親と良い関係を作り易いのである。「男の話」が、良い関係を作るのに使われ、これは子どもについての日々の対話において、また子どもに関して問題があるときや他の問題が起きるときに重要な役割をはたす。私がこの報告書を作成するにあたってインタビューした6歳未満の子どもを2人持つ父親は、男性保育者がいる保育所を意図的に選んだ。その理由は、女性しかいない保育所で彼自身がのけ者であると感じたからである。

保育所における男性の存在は、父親を保育所や子どもの日常生活にもっと参加させるのに重要な役割を果たすかもしれない。この参加は形式張らない日常的なものであるかもしれない。しかしそれは、もっと組織的なものでもありうる。イタリアとイギリスの保育所を含む最近の共同調査では、どのように保育所が家庭における責任をより均等に分担する助けになれるか、これを行う方法がどのように親とのグループワークの発展のために作用したかが調査されてきた。そして、次のように結論づけられている。

男性スタッフを置くことは、個人としてもグループとしても、父親や母親と効率的に仕事をするためにも重要である。男女混在の集団には、男性と女性のリーダーが必要であり、男性の集団には男性のリーダーが必要である。しかしながら、女性スタッフも男性の集団のリーダーとなること、またその逆も効果的であるかもしれない場合もある。父親が参加する活動は、家族や子どもと一緒に行う活動の一部とならなければならない。父親と一緒に活動することによって引き出される父親の要求や権利、そして父親と子どもの関係に関する知識や技能は、活動における全ての面で極めて重要

な要素となるはずである。(Ghedini et al, 1995, p. 29)

#### 4. 男性自身のために

男性の保育へのより多くの参加を阻むものの1つに、子どもの世話をするのは男性の仕事ではないという根拠のないいわれがある。男性が子どもの世話をできないという生物学的な理由はない。父親による子どもの世話やしつけに関する調査では、男性は女性と同じようにできるということが明らかにされている。生物学的障害というより、文化的障害なのである。後者が、より多くの男性を保育から遠ざける一番大きな障害なのである。

保育において男性の大多数が満足し、意味のある仕事をしている。このことはまず彼らが男性という性別以前に、プロの保育者であるという事実に基づいている。このことを示唆することは大変意義深い。(スウェーデンの男性研究者)

男の子と女の子のように、男性保育者と女性保育者もそれぞれに特徴をもった個人である。既に男の子と女の子の特徴について述べたように、ここでも、男性と女性に関して一般化されやすい。男性の性別役割は大体、文化的に定義できる。子どもの世話は、今までもそうであったし、現在でもそうであるが、主に母親の領域である。子どもが他人に面倒を見てもらう場合でも、大抵は他の女性の仕事であり、男性の仕事であることはほとんどなかった。子どもの面倒を見ることは、一般的には女性の仕事である。このために、男性は大抵、この分野において経験が少ないのである。

男性に関する一般化の中には、男性職員にとって不利になり得るものがある。彼らは、女性職員、子ども、そして親によって、伝統的な男性の役割を果たすように期待されることがある。例えば、彼らは(年少の)子どもと一緒に遊ぶ資格がない

とみなされ、サッカーが好きで、他の体を動かす活動や工作活動に参加することを期待される。女性保育者の中には、彼女らの保育所で男性が雇われたが、本当の男ではなかったと述べた人もいる。

イギリスの調査では、ほとんど全ての男性職員は「監督者」になることを押し付けられた。男性は伝統的でしつめの厳しい男性の役割を持ってふるまうように期待された。

世話をほどこす男性が必要とされたから、私が必要とされたのではない。私は何よりもまず、強くでしつめの厳しい男性像として必要とされたのだ。  
(Hill, 1990)

おそらくこの役割は、例えば養護施設で、障害のある子どものために働く男性や、いくぶん年長の子どものために働く男性によく求められる。しかし、管理やしつめは男性だけの仕事ではない。それは、スタッフ全員の仕事でなければならない。

このイギリスでの調査を行った人は、男性の性別役割や男らしさは、その人の民族的背景、社会的背景にも影響されるだろうし、これはもちろん、保育所の女性や子どもの場合にも当てはまると、指摘している。

保育所で働く男性は、性格の男性的な面と女性的な面の両方を見せることを許されるべきである。保育所で、伝統的な性別役割がなくなって欲しいと望むなら、男性も例えばおむつを替えたり、子どもにご飯を食べさせたり、食べ物を作ったり、後片付けをしたりなど、いわゆる典型的な女性の仕事を行うことが重要である。男性の中には、新しい経験が子どもとの親密な関係となる人もいるかもしれない。スウェーデンの心理学者Lars Jalmertによると、この関係は男性にとって有利なことであるかもしれないのである。

子どもとの親密な関係は、個人的な感情を表現することと同様に、他の人との親密な関係を築く能力を高めることになるかもしれない。(EC保育ネットワーク, 1990)

この議論は、父親と子どもの関係に関してではあるが、おそらく男性保育者と子どもの関係にも当てはめることができる。

ある母親が私に関心を寄せていた理由が、彼女の子どもをしつめるのを手伝うだろう男性像として私を見ていたからだというのは明らかであった。私はそういうふうに見られたくはない。(イギリスの男性職員)

私は仕事に大変満足しているし、昇進もしたので、給料は今ではそんなに悪くない。またさらによいことには、幼稚園や保育園ではとても人との関わりが親密である。つまり大人が子どもに馴染むことができれば、同じように子どもは大人と馴染むことができる。驚くほど多くの子どもが私のことをお父さんと呼ぶ。私は子どもに、君のお父さんではないけど、お父さんだよと言う。ある託児所では、子どもは男性職員を「託児所のお父さん」と呼ぶ。それは、よい呼び方だと思う。(イギリスの男性職員)

社会福祉に携わる男性は、年長の子どもや、年少の子どもを持つ女性のために働くことが多い。青少年の司法問題や仕事のことは男性に支配されている一方、5歳以下の子どもの世話はほとんど女性によって行われている。仕事の本質がほとんど問題にされることがないまま、男性・女性ともに、それぞれの領域に適応してきたために、こういった現実がより強固にされてきた。(イギリスの男性研究者)

## 5. 労働市場のために

保育に関する仕事は、労働市場において男性と女性に均等の雇用機会を保障するという目的をもって発展してきた。しかし保育自体は、仕事の領域としては性別によって区別されることが非常に多い。保育に関する仕事は、他の社会事業のように、極めて女性が支配的であり、典型的な女性の仕事となっている。

世界的にも、保育の仕事に携わる男性はほとんどいない。これは特に3歳未満の子どもに携わる仕事について当てはまる。子どもが大きくなればなるほど、子どもに関わる仕事をする男性の数が増える。保育に携わる男性は数の割に、女性より指導的立場に立つことが多い。男性は指導者に直接任命されるか、指導的立場に早く昇進し、それゆえ子どもと直接的な触れ合いを持つことが少ない。

女性・男性の全体的な雇用数や、研修の程度や仕事の種類に関する性別分析が可能な、保育所における労働力に関する統計を見つけるのは難しい。保育に携わる男性の割合は、子どもの年齢とともに高くなり、国によって違う。しかし全体的に見ると、就学前の子どものために働く男性の割合は5パーセントに満たない。

歴史上男性が女性の職域に入ることにより、その職域が発展するという事実がある。その場合に、女性が大多数を占める仕事領域に男性が入ることに対する慎重な議論がある。主な心配は、男性が女性の仕事や、保育の有益で楽しい面を奪ってしまうということである。また、男性がかつては女性が指導者であったのに、それをすぐに奪ってしまうかもしれないということも恐れられている。中にはこのことに関して非常に強固に考え、男性が雇用されるのを全く望まない人もいる。男性は社会の至る所で権力的立場におり、保育を侵略す

るのは許されてはならないというのである。

興味深いことにスウェーデンの男女同権の保育所にかかる調査によると、同数の男性が雇用されていても、女性は強い職業上のアイデンティティーを持ち続けている。これは、男性が保育という職業を奪っていないことを示す。これは、他の国には当てはまらないかもしれないが、スウェーデンでは保育者は社会的に地位の高い職業であり、社会において女性と男性の機会均等を達成する上で絶大な進歩を遂げてきたという事実を示しているのかもしれない。比較的多くの男性が保育所の指導的立場に立つということは事実である。指導的立場に立つ男性の数がそんなに（スウェーデンにおいてはともかく）圧倒的というのではない。指導者の9パーセント、そして雇用者全体の6パーセントが男性なのである。

40人の保育者のうち私以外に1人しか男性のいなかった会議に参加したことがある。彼は会議室の反対側にいたので私はそこにいて「こんにちは」と声をかけた。そうしたらすぐに女性の1人が「また彼らは団結しているよ。」と言った。(スウェーデンの男性保育者)

ノルウェーの全ての男性保育者のための会議（男性だけが参加することを許可される）で言われたことには、「このような、一方の性別の人だけの会議はもちろん非難されうるし、同権の立場から非難されてきた。しかし、女性が支配的な仕事における男性にとって時々このようなフォーラムが必要なのは、疑いはない。地元での、地域での、そして全国的な集会が、保育における少数派、すなわち男性職員の間により明確な職業アイデンティティーを育てるのに開かれることは、男性を保育に留めるのに重要な要因であるのかもしれない。(ノルウェー、トレーニングカレッジの男性準講師)

男性が女性の仕事を奪ってしまうかもしれないと恐れるのには、もっともな理由があるかもしれない。しかし、これからの数年間は、比較的少数の男性しか保育の仕事に就こうとしないだろう。全ての国で必要な保育の仕事の増加に伴って、新しい働き口のいくつかは男性に与えられるだろうし、それでも女性に多くの雇用機会が残るとするのは明らかである。保育に携わる男性の数を増やすという政策を実行すると同時に、より多くの女性を「男性の」仕事に、そして指導的立場に就かせるようにされるべきである。

保育において、性別の差をなくすことは、一般に社会で同権を促進するのに重要である。多くの国では、女性を男性が支配的な仕事に就かせようとする様々な運動があるが、男性を女性が支配的な仕事に就かせようとする運動はほとんど存在しない。男女混在の労働市場を実現させたいなら、男性が保育の仕事へ社会的に平等な参加をしなければならない。

男性が保育施設に少しずつ入っていったとしても、指導的立場にのみは行っていくことが強調されてしまうことは悲しいし、失望させられる。小学校での指導的地位に立つ大半が男性であるのと同じように、保育施設の労働者のほとんどは女性である。保育に携わる男性は多くの場合5歳未満の子どものために働いた経歴はほとんどなく、小さい子どもの世話をするのに実地経験がなく、そのため世話を受ける人やスタッフにとって指導者としてあまり好ましいものではなくなる。(イギリスの女性研究者)

[訳者注]

注(1)

本文中に出てくる(childcare) centerは「保育所」、nursery (school)は「託児所」kindergartenは「幼稚園」と訳した。

注(2)

「“childcare services” 保育という用語はこの報告書では、義務教育前の子どもに世話や教育を提供し、就学している子どもに世話やレクリエーションを供給する業務を意味する」とある。

注(3)

pedagogueは「保育者」、workerは「職員」、stuffは「スタッフ」と訳した。pedagogue「保育者」とworker「職員」の間に意味の違いはなく、どちらも「保育者」のことである。

しかし「スタッフ」に関しては、意味の違いが言及されておらず、もっと広い意味での「職員」を意味している可能性があるので「スタッフ」とそのまま訳した。

注(4)

本文中に「斜線の明朝体」の表記がある。これは原本に近い形でのものであり、原本の中においても、インタビューや一般的な意見として、表記されているものにできる限り忠実な形で再現しているものである。

注(5)

木下比呂美 「欧州委員会保育ネットワーク『保育者としての男性』の提起するもの」

保育情報No.236 1996 保育研究所 p. 6

注(6)

小崎恭弘 「保育における労働者としての男性 欧州連合保育ネットワーク討議資料より

『Men as Workers in Childcare Services』Jytte Juul Jensen 1995」神戸常盤短期大学紀要 第28号 2006 p37-44

注(7)

Japanese translation right arranged with the author by Union Press, Union Services Co., Ltd.



資料翻訳においては「Jytte Juul Jensen」承諾を得ている。

- ・付記 翻訳に際しては佛教大学の森田大介氏にご協力をいただいた。感謝申し上げます。

### 参 考 文 献

- ・木下比呂美 「なぜ、男性保育者は必要か？」  
『保育情報』No.260 1998 保育研究所
- ・埋橋玲子 「男性保育者導入の目的」 『保育の研究』No.19 2002 保育研究所
- ・中田奈月 「男性保育者の創出」 『保育学研究』第40巻 2002 日本保育学会
- ・小崎恭弘 「男性保育者物語」 2005 ミネルヴァ書房